

曾我光高叔父光経の大平賀郷押領

外山至生

はじめに

東京大学史料編纂所架蔵の影写本『南部文書』には、鎌倉・南北朝期の津輕曾我氏関係の文書が多数含まれている。そのなかの一通、元弘四年正月一〇日「曾我乙丸代道為軍忠状案」の紙背文書が、本稿で紹介する年月日欠「曾我乙丸代惠藤為円申状案」である。『岩手県中世文書』上巻（一九六〇年）に採録されず、これまで未紹介であったが、鎌倉末から建武政権期の津輕の曾我氏一族の動向を伝える史料として、また田舎郡「藤崎郷」「河辺郷」の郷名を伝える史料として、その価値は高い。津輕曾我氏の系譜、所領と伝領関係などについては、岡田清一氏^①、小口雅史氏^②による詳細な労作がすでにある。本稿は、新出史料によって、岡田氏と小口氏の研究成果に多少なりとも新知見をつけ加えることを目的としている。

原本とは照合できず、影写本から起こしたものはあるが、『青森県史』の編纂がすすめられている現在、中間報告というかたちではあっても、紹介することに意義があると考えた。また二節で、『岩手県中世文書』上巻が一通で代表した「曾我乙丸代道為軍忠状案」を四通ともあげ

たが、『岩手県中世文書』には反映されていない『南部文書』の文書群としての全体像を伺う一例として、煩雑ではあるがあえて列挙することとした。

なお文書の使用については、『岩手県中世文書』上巻、新編『弘前市史』資料編一古代中世編（一九九五年）を、それぞれ『岩』、『弘』と略記し、その文書番号を付すこととした。

一 曾我光高叔父光経の大平賀郷押領

史料一 曾我乙丸代惠藤為円申状案

「曾我乙丸代惠藤孫三郎入道為圓謹^{（右上カ）}

欲早叔父余次經光掠給安堵^{（同）}

津輕平賀郡内大平賀郷間事、

右於乙丸者、相副重代相伝手繼証文等^{（也カ）}、祖父光信讓與亡父同太郎入道光稱讓^{（久）}、有次第^{（曾）}、至于經光者、讓^{（口也）}□□^{（田）}貳丁在家三字是也、西国領地之^{（畠）}□□^{（目カ）}光稱許經光仁田一丁追給□□、大平賀郷競望之条類奸謀也、所詮^{（目カ）}復光

信・亡父光稱等讓狀如元賜□□□動仕間□□

「藤崎郷、令參上京都跡

田舎郡河邊郷、給主代金余彌太郎藤原朝臣

曾我乙丸代惠藤、^{爲円謹言上}曾我乙丸代惠藤孫三郎入道」

曾我乙丸（乙房丸とも）は曾我光高（のちの余一太郎貞光）の童名。

平賀郡大平賀郷は、嘉暦二年に父光頼（沙弥光称）から光高に譲渡されたもので（『岩』八九、『弘』六二七）、平賀郡に勢力を持つ津軽曾我氏にとつて、最も重要な所領のひとつである。その所領を押領したとされる余次経光は、「叔父」とあるので光頼の兄弟とわかる。光頼は、嘉元二年に父の泰光から大平賀郷を譲渡されている（『岩』五三、『弘』五九六）。

「祖父光信」は、建武年間と推定される文書にみえる「光高曾祖父曾我彌二郎入道光信」（『岩』一四六、『弘』六五八）に比定し、「曾」が脱落したものとみなした。「曾我系図」（『岩』三三九、『弘』一一四九）には「彌二郎光廣」とあり、仁治三年に「大平賀郷新屋淵村・長峰村地頭代職」を譲渡されている（『岩』一九、『弘』五七三、ただし表記は「光弘」）。光弘に関しては、大平賀郷全体の彼への譲渡、および泰光への譲渡に関する文書はない。「曾我乙丸代惠藤為円申状案」に「〔曾〕祖父光信讓與亡父同太郎入道光稱」ともあって、この間の伝領については、さらに検討の余地がある。

申状を作成した惠藤孫三郎入道為円について。曾我光高（貞光）に属

する惠藤氏一族には、建武元年五月の石河合戦で負傷した若党惠藤孫七（『岩』一一九、『弘』六三九）、建武二年三月に代官として申状を国府へ申請している惠藤三光為（『岩』一五二、『弘』六六五）、暦応二年九月の合戦で討死にした若党惠藤三郎（『岩』一八〇、『弘』六八二）などがみえる。光高（貞光）の若党、代官とされる人物たちで、「三郎」を名乗りとするものが多い。

申状の宛先は、「曾我乙丸代道為軍忠状案」との関係から、陸奥国府と考えられ、時期も同じころであろう。沙弥道為と惠藤為円の関係は不明だが、一紙の表裏に光高代官として陸奥国府への申状を記しており、同じ惠藤氏一族であった可能性が高い。

なお文書の後半、「藤崎郷、令參上京都跡」「田舎郡河邊郷、給主代金余彌太郎藤原朝臣」の部分と、前半の申状部分との関係は不明。筆跡等については原本と照合ができていないので、ここでは考察を省く。全体に判読し難い部分が多いが、これも原本との照合によってさらに解読が進むことが期待される。

二 四通の「曾我乙丸代道為軍忠状案」

さて、「曾我乙丸代惠藤為円申状案」を紙背文書とする元弘四年正月一〇日「曾我乙丸代道為軍忠状案」であるが、影写本『南部文書』には同内容の文書が四通存在する。『岩手県中世文書』上巻、『弘前市史』ともにすべてを活字化してはいないので、四通を影写順に次にあげることとする。

史料二① 曾我乙丸代道為軍忠状案（イ）

目安

注進

元弘三・四兩年津輕平賀郡大光寺合戦手負交名人等事

一人 豐嶋三郎二郎時貞 左小腕被射抜候了、正月一日、
同右股又被射候了、同日、

一人 曾我弥三郎光貞 自左小腕脇下以長柄被請
通候了、

一人 羽取二郎兵衛尉重泰 右腕上被射抜候了、十二月十一日、
正月八日、右目上被射通、半死半生、

一人 幡指彦太郎 右曾利腿被射通候了、正月八日、

一人 矢木弥二郎 以矢利被胸突、
半死半生候了、正月八日、

一人 印東小四郎光繼 左膝口被射抜候了、正月八日、

此外仁等余多雖被疵候、少事者不及注進候供、右手負注文如件、

元弘四年正月十日

曾我乙房丸代道為 判

史料二② 曾我乙丸代道為軍忠状案（ロ）

進上 於元弘三・四兩年津輕平賀郡大光寺

次第

曾我乙丸若黨等所被疵交名注文事

一人 豐鳥三郎次郎時貞 左小うて被射抜候訖、正月一日、同
右そりも、を被射了、

一人 曾我弥三郎光貞 左小うてより脇下あうけとをされ候了、
長柄、同日、

一人 羽取次郎兵衛重泰 右うての上を射抜、十二月十一日、
同正月八日、右目上を被射通了、半死半生、

一人 はたさし彦太郎 右そりも、お被射通、正月八日、

一人 矢木八郎 やりおもてとう中をつかれ 半死半生、

一人 胤頭小四郎光繼 左膝口を被射抜了、（同）、

右此条々、一事一言も偽令申候物者、奉始上梵天帝尺惣日本國中
大小神祇爵於原深可罷蒙候、仍起請文之状如件、

元弘三年正月十日 乙丸 沙弥道為（花押カ）

史料二③ 曾我乙丸代道為軍忠状案（ハ）

進上 於元弘三・四兩年津輕平賀郡大光寺楯郷合戦

次第

曾^{（我乙）}□□丸若黨等所被疵交名注文事

一人 豐嶋三郎次郎時貞 左小うてお被射候訖、正月一日、
同右そりも、を射候了、同日、

一人 曾我弥三郎光貞 左小うてより脇下あうけとをされ候了、
長柄、同日、

一人 羽取次郎兵衛重泰 右うての上を射抜候了、十二月十一日、
同正月八日、右目上を被射通了、半死半生、

一人 はたさし彦太郎 右そりも、お被射通、正月八日、

一人 矢木弥次郎 やりもてとう中をつかれ候了、半死半生同
正月八日、

一人 印東小四郎光繼 左膝口を被射了、同日、

右此条々、一事一言も偽令申候物者、奉始上梵天帝尺惣日本國中
大小神祇冥道神冥爵於原深可罷蒙候、仍起請之状如件、

元弘二年正月十日 乙丸代沙弥道為（裏花押^{（スミ押し）}）

史料二④ 曾我乙丸代道為軍忠状案（ニ）

進上 於元弘三・四兩年津輕平賀郡大光寺^{（通稱合戦）}□□□□

次第

曾我乙丸若黨等所被疵交名注文事

一人 豊嶋三郎次郎時貞 左小うてお射抜候、正月一日、同右そりも、を被射候了、

一人 曾我弥三郎光貞 左小うてより脇下あうけとをされ候了、長柄、同日、

一人 羽取次郎兵衛重泰 右うての上を射抜^{候了}、十二月十一日、同正月八日、右目上を被射通了、半死半生、

一人 はたさし彦太郎 右そりも、お被射通了、正月八日、

一人 矢木八郎 やりおもてとう中をつかれ、半死半生、同正月八日、

一人 胤頭小四郎光繼 左腰口を被射了、同日、

右此条々、一事一言を偽令申候物者、奉始上梵天帝尺惣日本國中

大小神儀冥王^{ミヤミ} 〓 討於原深可罷蒙候、仍起請文之状如件、

元弘三年正月十日 乙丸^{ワタ}沙弥道為

四通のうちでは、(ハ)が唯一『岩手県中世文書』上巻にとられているものである(『岩』一〇一、『弘』六三〇)。

他の三通中(イ)は、『岩』一〇一の註に「南部家には二通有り、他の一通は全文漢文体にて末尾の文章が「此外仁等余多難被疵候、少事者不及注進候供右手負注文如件」となっている。」とあるうちの、「他の一通」にあたるもの(『弘』六三二)。ただし、同註に「矢木弥次郎が八郎印東が胤頭になっているだけで他は同一である。」とあるのは、(イ)のことではなく、(ロ)もしくは(ニ)のことである。「曾我乙丸代惠藤為円申状案」は(ニ)の紙背文書にあたる。

四通を文体と本文末の形式で分けると、(イ)のみが全文漢文体で、本文末は「右手負注文如件」、他の三通は交名注進の内容部分が漢字かな交じり文で、本文末は「仍起請(文)之状如件」と共通している。

いっぽう若党の記載では、「八木弥二(次)郎」「印東小四郎光繼」とある(イ)(ハ)、「八木八郎」「胤頭小四郎光繼」とある(ロ)(ニ)に大別できる。この四通の構成、関係については興味深いものがあり、今後の検討課題としたい。なお影写本で確認した範囲なので、筆跡、花押についてはここでも考察を省く。

内容は、元弘三年末から元弘四年正月にかけての平賀郡大光寺での合戦の軍忠を記したものである(敵対した相手は不明)。元弘四年二月、曾我光高はこの合戦の忠勤によって、平賀郡岩楯・大平賀・沼楯の各郷(村)、名取郡四郎丸郷内若四郎名の知行が保証されるよう、陸奥国府へ申請している(『岩』一〇三・一〇四、『弘』六三二・六三三)。

しかし皮肉にも、軍忠を記した文書の裏に、知行を保証されるべき大平賀郷が叔父によって押領されるという事件が記されることになったのである。

三 曾我弥二郎経光

曾我弥二郎経光が大平賀郷を狙ったことについては、次の文書からも伺うことができる。

史料三 曾我光高申状

(裏書)

曾我太郎光高^{重名}乙房丸 謹言上、

「建武元、三、十九」

欲爲曾我余二經光被致散々濫防上者、被差國御使、被糺返損物錢貨已下財寶等、光高所領津輕平賀郡内大平賀村、被追出經光全所領事、

件條、伺當參跡隙、經光令亂入光高所領之、押入所務代官摩欄牛入道私宅、令奪所御年貢錢佰余貫文并小補雜已下物等、致散々濫防之上者、所詮被差在國御使云、郷内百姓等物無之、光高財寶等被取返之後、光高所領中被追出經光已下從類等、全所領致經光罪科者、爲向後仰上裁、仍恐々言上如件、

建武元年三月 日

〔押入所〕の裏に花押あり

建武元年三月、曾我光高は、曾我經光が大平賀郷に乱入し、年貢錢、財物等を奪ったとして、国府に所領の保全を申請した（『岩』一一二、『弘』六三五）。同年四月および五月に石河合戦で戦った「曾我与次」も同一人物であろう（『岩』一一九、『弘』六三九）。

以降、經光の姿は文書では確認できない。しかし、「曾我乙丸代惠藤為円申状案」の内容とあわせるとき、經光の大平賀郷乱入は、合戦のなかでの略奪行為ではなく、大平賀郷を押領しようとする意図を持った行動であることが明らかである。

これまで經光・光高が叔父・甥の関係であることが明らかでなかったため、岡田清一氏は曾我氏内部の嫡庶争い、いわゆる大光寺曾我氏と岩楯曾我氏の対立にこの事件を結びつけ、岩楯系曾我氏に属する光高に対して、經光は大光寺系曾我氏の一族であつたろうと推定している⁽³⁾。

これに対して小口雅史氏は、經光の「余二」という名乗りや「光」を実名中に含むことから、いわゆる岩楯系曾我氏の中の人物である可能性の方が高いと思う⁽⁴⁾。としている。この推定はまったく正しいが、しかし經光を光高の他腹の兄弟「余一資光の弟か」とした点は訂正を要する⁽⁵⁾。建武政権側にあつた光高は、北条氏与党として討伐されたいわゆる大光寺系曾我氏（『岩』一四一、『弘』六五二）との対立の他に、叔父とも対立し、大平賀郷の支配は危機に瀕していたのである。

では經光が大平賀郷を望んだ理由は何か。実は經光は父泰光から勘当された子息であつた。

嘉元二年五月二四日の「曾我泰光讓状」によつて、泰光は太郎光頼を嫡子にたて、養子の二郎八郎と三郎光俊の分を除いて大平賀郷の所領を譲渡し、翌年北条貞時の外題安堵を受けている（『岩』五三、『弘』五九六）。このとき「いや二郎もとよりふてう（不調）のものたるうあ、泰光にむけてのふるまい、ことさらきくわい（奇怪）に存するあひた、なかくかんとう（勘当）しをハぬ、もしかのやつにとうしん（同心）するものあらハ、ふけう（不孝）のしん（仁）として、泰光かあとをちきやう（知行）すへからす」とされた「いや二郎」こそが、弥二郎經光であつた。泰光から勘当された經光は、鎌倉幕府滅亡後の北奥の政治的混乱を好機として、大平賀郷を押領する行動に出たのであろう。

さらに「曾我系図」は、「雅（惟）重―光広―泰光―光頼」の系譜の名乗りを「小二郎―弥二郎―余一左衛門尉、童名犬二郎―左衛門太郎」としている。光頼以前は「二郎」を童名・名乗りとすることに着目すれば、実は「弥二郎」經光こそがもとの嫡子で、これを泰光が廃

し、新たに嫡子にたてた光頼以降、「太郎」「余一太郎」を名乗りとしたとも推測される。大平賀郷は経光の所領となるものであったのかもしれない。

ただし、泰光が嘉元二年五月二十四日の置文に、「もし泰光かめこともまことの中にも、嘉元二年五月廿四日、太郎光頼・三郎光俊・二郎八郎これ三人のゆつりよりほかにゆつり状とてたいして申ものあらハ、太郎光頼・三郎光俊あいともにかミへ申、ほうそにん（謀訴人）にをいてハ、さいくわ（罪科）を申あつへきなり、」（『岩』五五、『弘』五九八）と記したにもかかわらず、「曾我乙丸代惠藤為円申状案」では、経光は光信（光広）から田一町在家三字を譲られたとあり、さらに光称（光頼）から田二町を譲られてさえている。これ以上の考察はできないが、曾我氏の系譜と大平賀郷の伝領関係について、まだまだ多くの疑問点が残されていることを指摘して、今後の検討課題としたい。

四 田舎郡藤崎郷、河辺郷

「曾我乙丸代惠藤為円申状案」の後半、「藤崎郷、令參上京都跡」「田舎郡河邊郷、給主代金余彌太郎藤原朝臣」とある部分は、前後の脈絡がとれず、前半の申状部分との関係はよくわからない。最大の疑問は、いかなる関心を持って、平賀郡以外に所領を持たない津輕曾我氏の文書に、田舎郡内の両郷の状況を記したのかということである。

以下、簡単に疑問点や意義などを指摘しておきたい。

○「藤崎郷」について

「秋田家系図」（『弘』一一五三）などが津輕安藤氏発祥の地とする藤崎も、その地名が文書にあらわれるのは南北朝期からである。貞和三年五月の「曾我貞光申状」に「建武三年正月七日、令發向津輕藤崎・平内城等、對御敵南部又次郎師行・同舍弟政長・成田六郎左衛門尉以下輩致合戦之刻、貞光被疵、左膝口被射之、」とみえる（『岩』二二六、『弘』六九九）。しかし郷名としては、「曾我乙丸代惠藤為円申状案」が初見となるものである。

「令參上京都跡」とは、給主が京都へのほった跡との意であろうか。

○「河辺郷」について

河辺郷は鎌倉期には得宗領であり、南北朝・室町期には結城氏の所領として、「結城家文書」「白河証古文書」等にみえる。年月日欠の「結城宗広知行得宗領注文書」に「陸奥国津輕田舎郡内河辺・桜葉郷」とあるのが初見で（『弘』六五六）、延元元年四月には宗広から孫の顕朝へ（『弘』六七六）、応安二年九月には顕朝から子息満朝へ（『弘』七二七）、応永四年一〇月には満朝から子息氏朝へ（『弘』七四六）、それぞれ譲渡されている。結城氏関係以外、津輕の文書にあらわれるのはこれが初めてである。

藤原氏を称する給主代金余弥太郎については不明。津輕在地の代官としては、他に文保元年一二月の「平賀郡大平賀郷年貢結解状」にみえる大平賀郷の給主代「景範」（『岩』六九、『弘』六〇九は「京範」とする）、前述の建武元年三月の「曾我光高申状」にみえる大平賀郷内に私宅を構える所務代官「摩祢牛入道」があるだけで、貴重な例である。

以上、これまで未紹介であった「曾我乙丸代恵藤為円申状案」について、その意義と疑問点について、影写本から読み取れる範囲のことを考察してみた。冒頭にも述べたように『青森県史』の編纂事業が現在進められており、その中で原本との照合、文書の解釈等、さらに進展することが期待できる。詳しい論稿については別稿を期すものとした。

註

- (1) 岡田清一「元弘・建武期の津軽大乱と曾我氏」(羽下徳彦編『北日本中世史の研究』吉川弘文館、一九九〇年)。
- (2) 小口雅史「津軽曾我氏の基礎的研究」(『弘前大学国史研究』八九、一九九〇年)。
- (3) 岡田註(1) 論文三〇～三一頁。
- (4) 小口註(2) 論文四二頁。
- (5) 小口註(2) 論文二八頁。なお余一資光を、小口氏は光頼の子息で、光高とは他腹の兄弟と推定している(小口註(2) 論文二五頁)。当初は彼が嫡子にたてられたようだが、正中三年五月二七日の「曾我光頼讓状」に「他界」とあり(『岩』八七、『弘』六二三)、その跡を光高が継いだ。
- (6) 南北朝期、三郎光俊は貞光(光高)の軍勢に親類として加わり、代官をつとめている。建武三年ころ「討死」したともみえる(『岩』一七一・一二二・一二六、『弘』六七七・六七八・六九九)。
- (7) ただし、景(京)範については在地の代官かどうか見解が分かれるという。小口註(2) 論文三三頁。